

〈書評〉

矢部彰著『森鷗外 教育の視座』

——実践と研究と——

酒 井 敏

矢部氏は熱誠の人である。

「書評」の場でこう書き出すことは、あまりに場違いかも知れない。しかし、本書を読み終えた私の第一印象が、行文の背後から油然と湧き起こってくる筆者の人となりに対する、そのような感慨だったのだから、敢えてそのまま記しておく。私は、例えば「文藝と批評」誌の合評会や『森鷗外研究文献目録』作成などで、以前から氏とご一緒させていただいており、そうした場での氏の姿がこうした印象に影響していることは事実である。しかし、本書によって、今まで知ることがなかった教育の現場における氏の姿を垣間見たために、一層その思いを深めたのである。そして、面識の有無に関わらず、本書に収められた論考に共通する、氏の追求の真摯さと書くことへの情熱とに接した者は、誰しも私と同様の感慨を抱くのではなかろうか。

実際に本書を繙く前、『森鷗外 教育の視座』という書名から私が最初に連想したのは、新潮文庫版『青年』の解説で、高橋義

孝氏が『青年』において見逃すことのできない諸点の一つとして指摘した、『青年』の教育的意図であった。言い換えれば、鷗外の「啓蒙」家としての側面である。しかし、氏の営為は、そうした作者の一面の追求などではなく——後述のように「啓蒙精神」は、特に『舞姫』の読みにおいて重要な鍵となるが——、氏自身の深いモチーフに支えられたものであった。それは「あとがき」に、「教材としての鷗外文学を豊かに享受し、教育の『日の要求』に誠実に応えて実践を深めることこそ『私』の『夢』の具象化を果たす最善の道であること、その道を辿ることしか先人に近づくすべはないということ」を悟った」と具体的に書かれている。氏は謙遜しつつ書いておられるが、これは、教育の現場に立つ者が一様に心がけねばならないことでありながら、今日のように、研究の達成と教育の現場との乖離がしばしば問題とされる状況においては、実に厳しい「道」だと思う。

「教材としての鷗外文学」という前提がある以上、筆を進める氏の脳裏には常に、生徒達の顔が浮かんでいたに違いない。読者

としての彼らのイメージは、氏の文章にあくまでも平易・明解を要求する。そうした配慮が要請される一方で、作品を「豊かに享受」するためには、研究としての厳密さもまた、極められなければならない。所謂「術語」を遣えば一語で済むことでも、もしその「術語」が難解にわたる危惧があれば、できる限り平易な語でその意味を正確に言い換えなければならず、一度では曖昧だと思えば、二度・三度繰り返すことが必要となる。実践の場であれ研究の場であれ、恣意や自己満足が許されないのは当然のことだが、常に実践の場における相手を意識することで、自己内部の読者の目は平常に倍して鋭く、時に論の統一を脅かす程とならう。氏の選んだ「道」はかくて、困難な隘路となる。

その成果としての本書は、三部構成になっている。すなわち、「Ⅰ 作品論（『舞姫』『妄想』『山椒大夫』『高瀬舟』『寒山拾得』の五論文）」「Ⅱ 教材論（『現代国語教材』『舞姫』考』『教材』最後の一句『考』の二論文）」「Ⅲ 実践記録（『舞姫』授業ノート）」である。「あとがき」に、「国語教育の教材となる鷗外作品六篇に限り、作品論、教材論、教育実践記録を『教育の視座』に立つて公にする」と書かれているように、採り上げられた作品は、全て「国語教育の教材」となるものであり、多年にわたる教育現場での経験に裏打ちされて選ばれている。そして、確認しておけば、その構成に明らかなように、本書は単なる「作品論」集や単なる「実践記録」集ではない。五篇の「作品論」を一つの達成として巻頭に据えることでその成果を問おうとした、教育の現場を踏まえて研究の場へ架橋しようとする試みなのである。

八篇の論考はいずれも、甲乙つけがたい力篇であるが、「国語教育の教材」として考えた場合、最大の難物だが避けて通れない『舞姫』が中心的な位置を占めるのは自然であろう。三部構成の全てにわたって『舞姫』が登場するのも頷ける。そこで、この書評では特に『舞姫』に関する三論考を取り上げて、検討してゆくこととしたい。限られた紙数という理由もあるが、そうすることは、氏のモチーフに照らして正当なことであり、また、先に触れた、教育の現場と研究の現状との乖離を埋める可能性を探ることもなと思うからである。

巻末の「初出一覧」に明らかなように、『舞姫』をめぐる三論考は、『舞姫』授業ノート（昭和60・2）『現代国語教材』『舞姫』考（同・8）『舞姫』（昭和63・10）の順で発表されている（原題の異なるものあり。本書中の標題に従う）。実践→教材論→作品論の順である。本書所収の『舞姫』（以下『作品論』と記す）は、この順序で氏の内部に成熟してきたと言えよう。しかし、もちろんここが終点ではない。『現代国語教材』『舞姫』考（以下『教材論』と記す）に、「授業を展開する以前に」「教師自らの総合的な『舞姫』観を確立することが要請されている」とあるように、授業とは、教師自身の「読み」が生徒の反応によって検証される場である。当然、授業実践に先立って教材研究があったはずであり、その段階での氏の「読み」が実践の場における生徒達との葛藤を経て、『教材論』を生み、より完成度の高い「読み」として『作品論』がまとめられた。先に記した「成熟」である。とすれば、

本書に示された氏の『作品論』は、再び実践の場で生徒達に問いかけられることになるだろう。その意味で、本書の三論考は、実は無限の循環運動の一こまなのであり、そうした一連の真摯な営みが読み取れるところに、本書の試みの独自の価値がある。

『舞姫』授業ノート（以下『実践』と記す）は、三十六時間に及ぶ実践の記録であり、氏の授業の熱気がそのまま伝わって来るようで、思わず引き込まれて読了した。「第二十五時」などに書かれる率直な感慨や、「第十七時」「第二十一時」などに書かれる、やや軽薄であるが、自分達の問題として作品を考えようとする生徒の反応など、特に生き生きと肉声が伝わってくるように感じられた。しかし、「教える側」（高校での経験は僅かでも私などもこちらに感情移入してしまうが）の苦勞がよくわかる一方で、「受ける側」についての記録がもっと豊富に書き込まれてもよいという印象が残った。特に「第三十一時」以降の六時間を充当した「読後感」に表れた生徒の反応の幾つかが示されていれば、「第二十七時」で生徒達の取り組みの姿勢の変化が書かれているだけに、現場の授業運営に参考となる点が多かったのではないかと思う（この点、初出誌では配慮されていたと記憶する）。もっとも『舞姫』に、三十六時間もの授業時間を充てられるというところが、既に希有なことなのかも知れないが。

しかし、私はこの『実践』に示されている授業のポイント、例えば「第三時」の結論部分で書かれる、

「五年前」と「こたび」の「反応（コントラスト）」に注意させ、「再び気取半之丞に与ふる書」で言う「反応」が、

『舞姫』創作上の重要な要素を担っていることを補説。「五年前」の豊太郎はいかなる人物であったか、問う。旺盛な好奇心、あらゆるものを吸収しようとする意欲と自負、栄達の念に染めあげられたエリート像がそれであるが、見落とせないのは、「こたび」の状況においても変質することのない天成のものと言うほかないような啓蒙主義の姿勢である。「民間学」に支えられた通信員、「舌人」の仕事のいずれにも共通して発露する本質は、森鷗外その人に備わる「啓蒙」的姿勢そのものの巧まざる流出であったと言うべきであろう。

とか、「第二十七時」で指摘される、

『舞姫』は、太田豊太郎における「他者」の認識を語る作品である。それは森鷗外の啓蒙主義思想の内包する最大の誤謬でもあった「他者」の意志の存在ということに対する認識の欠如と等価であった、と言えるのではあるまいか。

などに注目する。実際の授業で、ここまで鷗外が顔を出しているかどうかはともかく、これらの記述に窺われる矢部氏の『舞姫』認識・鷗外認識が、『教材論』『作品論』において繰り返され、同じキーワードとなっているからである。『教材論』には、「反応」について「一、構成と文体——「反応」を視座に——」があり、「啓蒙精神」も「三、豊太郎の形象——「啓蒙精神」と「慈悲」と——」（本稿の意図からはずれるが、この「慈悲」がやがて「利他」さらに「献身」へと発展し、本書における氏の作品分析の一つの基軸になっていることを付記しておく）があつて、

豊太郎は、「法の精神」というものの本質を「啓蒙」するこ

とを意図して官長に「書」を送ったのである。そこには、官長の歎息を買おうとする慮りよりも、官長をも「啓蒙」せずにはやまないとする豊太郎の気魄、日本近代化に寄せる渴望の念のみが息づいていたに違いない。また豊太郎は、日本近代の官僚組織から追放され、野に下ったのちも、挫折感にうちめされることなく、新聞の原稿を書く。新生日本には、学問はもとより「民間学」すら育っていないからである。豊太郎を駆りたてるものは、豊太郎の精神の最深处に息づき、すこしも休むことなく肥大し続けている「啓蒙精神」とでも呼ぶべき生きものではなかったろうか。（中略）この「啓蒙精神」は、『舞姫』作品中、ついに挫折することはもちろん変質することもなかった豊太郎の本質と言わざるをえない。と説かれる。新聞の通信員として原稿を書く豊太郎の営みが、「挫折感にうちのめされることなく」なされていたかどうか、言い換えれば、「民間学」を彼がどの程度評価していたか、については私は氏といささか見解を異にするが、引用部分から、『実践』において基調となった「読み」が周到な論理によって補強され、『教材論』においても、同じく基調をなしていることが理解できよう。氏の営みは、『教育の視座』に立って」という言葉通り、実践の場と地続きの形で進められてゆくのである。

従って、『作品論』においても、基調となるのはこの「読み」である。しかし、ここではその「読み」が現在の研究状況において、どのような有効性を持つかが確かめられなければならない。『作品論』において氏は多くの先行論文を引用しながら、慎重に

その責を果たしてゆく。例えば「近代的自我」である。『実践』の二つめの引用にある、『舞姫』を「太田豊太郎における『他者』の認識を語る作品である」とする理解に関わるわけだが、氏は『教材論』で「四、主題——「我と人との関係」をめぐる——」を立てて、教授資料の「主題」が作品中における「近代的自我」のめざめと挫折を前提としているのに疑義を提出、『舞姫』において、豊太郎の『近代的自我』の認識は、『舞姫』作品の終末にいたって達成された」としている。このように読み解くことは、『舞姫』をより統一的に破綻なく理解させる上では有効であるが、一方、「近代的自我」なるものが、そのように固定的であるかという疑問を残す。氏は、『作品論』においては「達成」という一面的な理解を捨てて、先行論文の検討の後、「太田豊太郎の『自我』の『生成』と『崩壊』との認識構造がきわめて顕著に『近代的』である」との動的な理解を示している。このように位置づけることで、今日ではもう発展する余地がないと言われている『舞姫』における「近代的自我」の問題が掬い上げられ、さらに研究の場に自閉することなく教育の現場にフィード・バックする立場が保証されることになる。実践の場を踏まえての作品研究の面目躍如と言った部分であろう。

そしてやはり、「啓蒙精神」は『作品論』においても基調をなす。

太田豊太郎は渾くような「対読者意識」に促され、ひたすら書いている。太田豊太郎の「対読者意識」を駆り立ててやまない認識の中枢に据えられるのは揺るぎない信念となつて凝

固する啓蒙精神であり（中略）太田豊太郎の啓蒙精神の発露するところ、『舞姫』の「対読者意識」は「国民之友の紙上に公」にせずにはいられないまでに膨張する。

と書かれているように、手記を執筆する豊太郎のモチーフは、この「啓蒙精神」を中核とするものと読み解かれるのである。この記述は、「相沢謙吉」署名で発表された『舞姫に就きて気取半之丞に与ふる書』に「近ごろ聞けば、鷗外漁史といふものありて、此記に題するに舞姫の二字を以てし、これを国民之友の紙上に公にしたりといふ」と書かれているのを念頭に置いているわけで、そこから、作者の問題へとつながる回路が設定されていることになる。ここから、豊太郎の「書く」営みと鷗外の「書く」営みとの関係が、立体的に見えてくるような論述がなされると、より説得的であったと思うが、作品の勘所を押さえた重要な指摘と言えよう。

『作品論』における氏の立論の姿勢は、安易に作者を導入することを戒める今日の作品研究の立場を意識しつつ、その立場が方法に自閉してしまう傾向に批判的である。そこには、何より鷗外森林太郎作『舞姫』本文に忠実に進めなければならない、授業の姿勢が生きていると言えよう。私は『舞姫』の読みを深めるにについては、豊太郎とエリスだけでなく、ある断念を強いつつ豊太郎を救済することになる相沢の意味を作品内部でもっと考えてみたいと思う立場にあり、その意味でいささかの不満がないわけではないが、氏の『作品論』は、地に足の着いた周到・綿密なものとして面白く、高く評価したい達成であると思う。『舞姫』の研究

は多岐にわたっているが、教育の現場から実践を経てまとめられた作品論は決して多くない。その意味で、氏の成果がさらに実践の場で多くの人々に検証され、深められることを望むとともに、このような真摯な営みが教育の現場で繰り返され、研究状況を刺激するような関係が確立されることを願う。そして、種々の制約の中でこの一冊をまとめられた矢部氏の労に深く敬服する。

再び言う。矢部氏は熱誠の人である。

（中京大学）

（一九九一・一・三〇 近代文藝社 四六判 三四二頁 二五〇〇円）